

2015 年度 (平成 27 年度)

浦和明の星女子中学校入学試験問題

(第 一 回)

国 語

(50 分)

注 意

1. 試験の開始まで問題用紙を開かないこと。
2. 問題用紙は全部で9ページある。試験開始と同時にページ数を確認すること。
3. 答えはすべて解答用紙のきめられたところに、はっきり書くこと。なお、解答用紙の※印欄のところは記入しないこと。
4. 印刷のはっきりしないところがある場合は、手をあげて係の先生にきくこと。
5. 字数制限のある場合は、句読点も一字と数えて答えること。

受験番号

【一】 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

トキは里山に暮らす、体長八〇センチほどの大きさの鳥です。「里山」というのは伝統的な日本の農業地帯にあった、田んぼや畑、茅場、雑木林などがセットになった土地のことです。

田んぼは米を作るところで、春に水を入れてイネを植えます。イネがよく育つように田んぼに肥料を入れますが、その肥料はウシの糞を集めてワラなどと混ぜて発酵させたもので、とても品質のよいものです。

ウシを飼うためには餌となる草が必要で、里山にはそのための茅場がありました。茅場というのはススキが生える場所で、カヤというのはススキの古い名前です。茅場は放っておくと藪になるので、ときどき草刈をしました。刈ったススキは家畜の餌にも使いましたが、茅葺き屋根という農家の屋根にも使いましたし、もちろん秋にお月見をするときに飾ったりもしました。茅場には①秋の七草が生えたとし、モズやキジやタヌキなどの鳥や獣もたくさんいました。

田んぼや畑は農作物を作る代表的な場所ですが、里山には田畑だけでなく林もあります。林には雑木林と人工林があります。

雑木林というのはナラやカシなどが生える林で、一番たいせつな役割は燃料となる炭を作ることになりました。林を伐るとナラの木などは再生してきて、二〇年くらいで炭焼きをするのに適当な太さにまで育ちます。こういう林にはガマズミなど実のなる低木も多く、山菜やキノコもありますから、人々はそれぞれの季節に植物を利用しました。また、台所や風呂で火をおこすのに使う薪や、たき付けといって初めに燃やす小枝もここから得ることができました。それにネザサやヤダケなども生えていて、竿やカゴを作ったりしました。さらに、枯葉が積もって腐葉土になるので、田畑の肥料にもなりました。

これに対して人工林は、スギやヒノキの針葉樹で構成された、材木をとるための林です。暗いのであまり草花はありませんが、スギの落ち葉はたき付けに使われました。

農家の周りには田畑と林が組み合わさっており、小川も流れていました。このような農業がおこなわれていた時代の里山は、動物や植物で溢れていました。

トキは田んぼにたくさんいた魚やカエルなどを食べますが、果は木の上に作りませんでした。だからトキには田んぼだけでなく、林も必要なのです。この点、里山には必ず林があったので、都合がよかったのです。

地が健全であれば動物は絶滅してしまうほどには減らないものです。その何よりの証拠は、そうして何百年も人とトキは共存してきたという事実です。

里山が変化してしまった今、トキのためにどうするのがよいのでしょうか。今の日本にトキを獲って食べようという人はいませから、乱獲の心配はありません。あとは生息地をよくすればよいということになります。ところがこれが簡単ではないのです。

田んぼがあつて雑木林があればトキの生息地の基本は確保されたように思えます。しかし里山というのは、農業がおこなわれて初めて機能します。その農業とは、自然と一体となつて持続的に維持されてきたものです。

田んぼの話をしましたが、田んぼでの米作りは日本の農業の基本です。米は私たちの主食です。今でも、就職して②稼ぎを得られるようになることを「飯が食えるようになる」といふほどです。ですから、農民はイネを育てることに汗を流しました。

田んぼは、高度な土木工事によって山から水を取り込み、また流し出せるような構造を持っています。そこに有機肥料を入れ込みます。肥料には、**A**の枯葉でできた腐葉土や緑の枝も使ったし、家畜の糞と草を混ぜて発酵させた堆肥も使いました。これらは田んぼそのものから得られるものではなく、里山に田んぼとセットとしてある**A**で生まれるのです。また、家畜の飼料は**B**で生まれます。栄養豊かな田んぼには微生物がたくさんいるので、オタマジャクシや小魚などが育ち、それを食べる大きな魚がいました。また畦に生える草も豊富なので、たくさんの昆虫がいて、イネの害虫にもなりましたが、カエルやクモの餌にもなりました。そのカエルやネズミをイタチやヘビが食べていました。

トキもこのような③たくさんの動植物のつながりの中に暮らし、田んぼにいる魚、貝類、カエル、カニなどを食べていたのです。

一九六〇年代に経済復興を果たした日本では、エネルギー利用に革命的とも言える変化が起きました。それまでは火力は基本的に炭を利用しており、風呂を焚いた食事の準備をするのに薪を燃やしていました。ちよつとお茶を入れるといつても薪に火をつけるところから始めないといけなかったわけです。それがガスや灯油に代わったので、薪や炭がいらなくなりました。薪や炭はそれまで雑木林からとっていたのです。

雑木林は原生林とは大きく違います。人間がそこから木を伐つて薪や炭をとりますから、雑木林には伐られたら枯れてしまうような④力のない木は徐々になくなつていき、伐られたあとに根元から新しい枝を伸ばして新しい幹へと育つて

〈中略〉

トキにとつての里山は、餌をとる田んぼと果を作る林の両方があるという、生息地として好都合な条件をそなえていて、人がトキを獲って食べるということさえなければ安心して暮らす場所でした。

太平洋戦争のあいだは、総力戦といって国のすべてをあげて戦っていましたから、自然は顧みられませんでした。戦争はあらゆる物資を大量に必要とし、材木もその例外ではなく、森林は伐採されて禿げ山ができていました。野生動物に何が起こったかは記録がないためによくわかりません。農村は食料増産にはげみましたが、多くの若い男子は兵隊になったために、労働力が乏しくなりました。そうした変化はありましたが、国民の多くが農民であり、有機農業をおこなっていたという点では、戦争中も戦後しばらくも、基本的には大きな変化がなかったと言えます。

大きな変化が起きたのは昭和三〇年頃、一九五〇年代後半くらいからだと思います。戦争で失われた国土を回復し、経済を復興させたいという思いで、国中が懸命でした。国の政治も経済を優先させました。そのために工業労働力を都市に集めました。

農村では徐々に人が少なくなつたので、⑤効率的に農業をすることが奨められました。機械の力で田んぼを改良し、水路にはU字管という、断面がUの形をしたコンクリートの管がはり巡らされました。また、⑥害虫を殺すために「農薬」という名の殺虫剤が大量に使われ、家畜の糞のかわりに化学肥料が使われるようになりました。そうして田んぼは米を作る工場のようにになりました。

トキは田んぼに暮らす魚やカエルや貝などを食べていましたが、U字管の水路からは魚は消え、田んぼの魚やカエルも農薬によっていなくなりました。

一九六〇年代に死亡したトキを分析したら、高濃度の有機水銀が⑦ケンシユツされたそうです。生態学ではよく知られていることですが、餌の中にある化学物質が含まれている場合、その餌を食べた動物の体内では、その化学物質の濃度が餌の中の濃度よりも高まります。そして、その動物を別の動物が食べると、その体内ではさらに濃度が高くなります。これを「生物濃縮」といいます。なんらかの原因で水田に有機水銀が流され、それが水田にすむフナやコイなどを食べた魚の体内にたまり、さらにその魚を食べたトキの体内で、濃縮された可能性は十分あると思われるます。

昭和の初めまでに起きたトキの大減少は乱獲が原因だったようですが、絶滅にどうめをさしたのは、⑧戦後の里山がもはやトキの生息地として適さないものになつてしまったことだと思われまます。たとえ一時的にかなりの数が減つていても、生息

ゆく力をもつ、ナラやサクラなどの木が残ります。こうして伸びてくる枝を「**ひこ**え」などといいます。彦というのは男の子ですから、男の子のように元気に伸びてくる枝という意味です。

伐るときは、広い面積を一度に伐採してしまうのではなく、少しずつ伐りました。そのため、ある場所は伐り取ったばかりでも、となりには一〇年ほど経った藪のような林が、そのとなりにはもう十分に林と呼べる生長した林がある、という具合に配置されていきました。人はそうして三〇年くらいの周期で、雑木林を伐り取っては、そこから炭や薪を作つて利用してきたのです。

ところが、燃料革命が進んだあと、雑木林は利用されなくなり、手入れもされなくなつてしまいました。そうするとササが繁茂したり、藪になったりして、以前のような木もれ日の射す明るい林ではなく、暗くて歩くのもたいへんな林になってしまいました。

また、農村からは若者がいなくなり、サラリーマンになる人が多くなりました。そのため、農業をするのはおじいさん、おばあさんだけになってしまい、やがて年をとつて作業がなかなかできなくなりました。そうして、米作りをしない田んぼが増えてゆきました。

田んぼの広さを表すのに、反という単位を使うので、田んぼを減らすという意味で「減反」ということが使われるようになりました。かつて田んぼだったところは、雑草が生えた荒地地になったり、観光のためと称してコスモスを生やしたりしているところもあります。それは農業とはほど遠い景色です。

見かけは昔と同じようにイネが生え、米作りに利用されている田んぼにも、労働力がなくなつたために、化学肥料が撒かれ、農薬が散布されています。こういう田んぼには小さな生き物がいないので、カエルや魚もいません。ですからトキも生きにくいのです。

こういう流れを考えれば、⑨里山があるのだから、飼育して数が増えたトキを放つて復活する」というのは甘い考えだと言わなければなりません。

もちろん、すべてを昔のままに戻すのがよいわけではありません。必要な機械化や、合理化は大いに進めるべきです。しかし、田んぼを**C**のようにみなすのではなく、トキが暮らせる場所でもあるという考え方を持たなければなりません。

そして、トキの復活を望むのであれば、すべてを農家の人にまかせるのではなく、日本人のみんなが協力することが必要です。トキが暮らせるといふことは、健全な生態系があるということです。そこでできる米は安全です。ただ、そういう米作りは農薬を使う米作りよりは手間がかかるので、どうしても生産価格が高くなり

ます。たとえば、このとき、日本中の人が、高くても安全でおいしいお米を食べよう、それでトキが守られるのならそういうお米を買おう、という選択をすれば、トキと共存できる農業が可能になるはずです。

実際に、そういうお米は作られていて、少しずつ売れ行きが伸びています。^⑧都会に住んでいるのだからトキの保護に協力できない」と考えるのではなく、できることを考えれば実質的に協力することができるとです。

世界的にみれば、日本は工業化が高度に進み、高い技術力を持ち、便利で快適な都市生活が営まれている国であり、そこでは野生動物が少なくなったり、まったくいなくなったりしても不思議ではありません。実際、トキは激減し、ついにはいなくなりました。しかし、そのような国でも、社会全体で取り組むことによって、トキは復活できそうだとこのころにまでたどりつきました。その「カテイ」では、トキやトキをめぐる環境のことをよく調べ、回復に向けた地道な努力が続けられてきたことを忘れてはいけません。このことは、私たちが誇らしく感じてよいことだと思います。ここでトキを例にとりあげたのは、^⑨そのような思いからです。

(高槻成紀著「動物を守りたい君へ」より)

問1 太線部a「ケンシユツ」・b「稼(ぎ)」・c「カテイ」について、カタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問2 傍線部①「秋の七草」ではないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア なずな イ なでしこ ウ おみなえし エ はぎ オ もみじ

問3 傍線部②「効率的」を打ち消しのかたちにする場合、上につける漢字一字を答えなさい。

問9 次は、傍線部⑦「里山があるのだから、飼育して数が増えたトキを放せば復活する」というのは甘い考えだと言わなければなりません」と筆者が主張する理由を説明した文です。空欄Ⅰ～Ⅳに入る適切な語句を、2ページの本文中から指定された字数でそれぞれ抜き出し、文を完成させなさい。

トキの復活のためには、里山さえあれば良いのではない。里山は、農業がおこなわれて初めて機能する。「Ⅰ(二字)」と一体となった農業が「Ⅱ(六字)」されることで、里山の田んぼは初めてトキをふくめた多くの生き物が暮らせる「Ⅲ(四字)」な田んぼとなるのだ。そのような農業を実現するためには、高齢化によって不足してきた農村の「Ⅳ(三字)」をどう確保するかなどの問題を解決しなければならず、里山があればトキが復活するというような簡単な問題ではないと思われるから。

問10 空欄Cに入る適切な表現を1ページの本文中から六字で抜き出し、答えなさい。

問11 傍線部⑧について、トキを保護するために具体的にどのようなことができるかと筆者は述べていますか。次の文の空欄Ⅰ～Ⅳに入る適切な語を、本文中からそれぞれ二字で抜き出し、答えを完成させなさい。ただし同じ語は入りません。

都会の消費者は、より安くておいしい米を買おうとする。しかし、高くても農業を使わない「Ⅰ」な米を消費者が買うことで、「Ⅱ」がかかる有機農業を支えることになる。有機農業は化学肥料や農薬に頼らない農業であり、人とトキとの「Ⅲ」を可能にする。つまり、トキの保護活動に直接参加できなくても、買う米を変えることによって、結果としてトキが暮らせる「Ⅳ」な生息地を守ることにつながるのである。

問4 傍線部③中で「農業を」によって強調していることにはどのような意図があると考えられますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 農業は昆虫の大切な命を大量に奪うものであるが、農作物の成長を助ける物質としては絶対に欠かせない「薬」だという複雑な心情を伝える意図。

イ 昆虫を殺したり魚やトキの体内に化学物質をためこんだりする負の面を、「薬」という名によって隠していることへの反省をうながす意図。

ウ 農作物にとっては健康や生命を守る「薬」である農薬が、農作物を食べる昆虫にとっては命を奪うものでしかないという皮肉をこめる意図。

エ 「薬」としての役割を果たしていないばかりか、生命に害を与えるにもかかわらず、農業に頼りきった農業を行うことへの疑問を投げかける意図。

問5 傍線部④「戦後の里山がもはやトキの生息地として適さないものになってしまった」とありますが、もともと里山がトキの生息地として適していたのはどうしてですか。「Ⅰ」から。」に続くかたちで傍線部④以前の本文中から十九字で抜き出し、答えなさい。

問6 空欄A・Bに入る適切な語をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア 田畑 イ 茅場 ウ 原生林 エ 雑木林 オ 人工林

問7 傍線部⑤「たくさんの動植物のつながり」を意味する語を傍線部⑤以降の本文中から三字で抜き出し、答えなさい。

問8 傍線部⑥「力」の空欄には二字の熟語が入ります。直後の波線部「伐られたあとに根元から新しい枝を伸ばして新しい幹へと育ってゆく」という表現を手がかりにして、適切な語を答えなさい。

問12 傍線部⑨「そのような思い」とはどのような思いですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 都会にいてもトキの保護に協力しようと進んで行動する日本人の姿勢は、世界的にも他に例がないほど素晴らしいという思い。

イ 自然保護に取り組むことは、日本人が工業技術や農業技術の向上を追求しているから可能なのだという思い。

ウ 絶滅した動物を復活させようと努力を続けることは、日本の工業化の流れを止め、環境破壊を食い止めるために有効だという思い。

エ 高度に工業化が進み快適な生活が送れるだけではとせず、自然保護について着実に努力を重ねていることを日本人の長所とみるべきだという思い。

〔二〕 次の文章は、乾ルカ著『願いながら、祈りながら』の一節です。本文を読み、後の問いに答えなさい。なお本文中の「」の表現は、直前の語の意味です。

松本憲太と江崎学は北海道の村立生田羽中学校（分校）に通う中学一年生です。憲太の祖父が村長をしている生田羽村に、学は幼いころ両親とともに東京から移住してきました。学は勉強が出来るだけでなく習字や絵でも表彰されるような「神童」として知られた存在です。本文は、夏休みが終わり、中学校（本校）で「夜空を見る会」が行われる日のことです。二人で会場に来たもののすぐに学は見えなくなり、天気の急変により会は中止になり、家に帰ることになったので、憲太は校内を探して図書室で勉強している学を見つけます。

落雷が生んだ瞬間的な明るさは、憲太にあるものを見せた。

学がいる席に置かれた、数冊のテキスト。

教科書ではなかった。サイズが違う。進学塾のものだな、と、ピンと来た。

憲太は、はあと息を吐いて、呆れ声を出した。

「こんなところまで勉強道具持ってきたのかよ」

学が〔A〕顔を背けて、椅子に座る。憲太は長机を挟んでその前に立った。

「亮介から聞いたの？ 僕がここにいるって」

「違うよ。あいつは正反対のことを言った。ここに来たのは、しらみつぶしに探していただけだ」

「そう」

〔B〕口ぶりに、憲太は苛立ちを覚えた。

「なあ、学。おまえ、中止にならなくても、ここにこもって勉強してるつもりだったのか？ みんなが外で空見てる中、一人で」

「だって」

学が眼鏡の奥から険しい目で睨んでくる。「僕には悠長に星や月を見ている時間はないんだ」

「この窓から校庭見えるだろ。ってことは、校庭からも図書室の電気がついてることがわかるじゃん。中止になって、おまけに停電にもなったからいいようなものだけど、天気悪くならなかったら、みんなあそこに誰がいるんだろうって、変に思っただろうな」

「構わないよ、僕は勉強しなくちゃいけないんだから」

X はつきりと目にできた雷は、地に向かって落ちるのではなく、空を切り裂くものだった。枝分かれしながら伸びる閃光が、空の端から端まで届く。真っ黒な夜空に強烈なきらめきの亀裂が走る。

「うわ、すごい」

今のおまえ、見た？ と、声を荒げたことも忘れて問おうとした矢先、

「学？」

憲太はびっくりした。

学が泣きそうになっていたからだ。

学がべそをかく顔なんて、いつぶりに見ただろう？ 見たとしたらたぶん、小学校に上がる前だ。学と聞いて憲太が頭に浮かべる彼の表情は、最近では暗記カードや教科書などを睨みつけるようにしているものと、真面目で整っていて、いかにも頭脳明晰そうにまっすぐ前を見つめる横顔、それから、こちらを振り向いて心底嬉しげに笑う顔——それらだ。

いやそれよりも、なぜ、涙ぐんでいるんだろう。

「おい……おまえ」

「……憲太は、両親もおじいさんもおばあさんも、ずっとこの村じゃないか。でも僕は違う。親が勝手に……田舎に変な夢抱いて、こんな村に来て」

村おこしの一環として、十数年前に農地を無償で貸し出すと都会から若夫婦を誘致したのは、憲太の祖父の策だった。

「うちの親がそのまま都会にいてくれたら、僕の今はきっと違ってた。こんな村じゃ、十分な勉強なんてできない。札幌や大きな街の子は、なんの苦労もなく進学塾や予備校に通っている。ネットの授業配信も、もう少し先だっていうし」

泣きべそ理由を推しはかりながら、憲太は学をとりあえず励ましてみた。

「でもおまえ、今でも十分すごいじゃん」

「どこがだよー」

大声を出した学の頬を伝い、細い顎の先からしずくが落ちる。「成績は下がったんだよ、僕は僕なりにやっつたつもりだったのに……僕より上のやつらは、みんな都会の子だった。彼らと同じことをやれたら、絶対負けなかったのに」

学は顎を手の甲で拭いながら、進学塾のテキストを拾い上げた。

「環境が違うんだ、勉強する環境が……こんな田舎にいて、それだけですごいハンデだ。このままなら、きっとこれからどんどん成績は下がる。成績が下がる

〔C〕 言い放った学に、憲太は少々腹が立った。

「勉強勉強って……おまえ、変わったよな」

学が利発そうな目を細める。「なにが言いたいの？」

「おまえなんて、そんなにがりがり勉強しなくても、余裕で大丈夫だろう？ いつも一番だしさ」

「四人しかいないクラスで一番になったところで、なんの意味もないよ」

「いや、それ以外でもすごいじゃん。六年のときのテストは村の教育委員会の人 came たし、塾の模試も成績優秀者になってる」

「……サイトを見たんだったね」

「おう」

「夏の模試の結果も？」

「うん。ちよっと前より落ちちゃったけど、相変わらずトップクラスだったな」

学が机の上のテキストに手のひらを置いた。「落ちたのは事実だよ」

「あんなの誤差の範囲だよ。なあ、そんなにいつもいつも勉強する必要、おまえにあんのか？ 俺だったらもつと遊んじゃうよ」

「僕には必要あるんだ」

「ないと思うけどな。だっておまえ、すごいじゃん。『神童』じゃん。村のみんなもそう言ってるじゃん」

すると、学は急に視線を逸らして吐き捨てた。「村のみんな、とか、憲太にはわかんないんだよ」

「はあ？」

いきなりの言い草に、思わず憲太の声が大きくなった。「なんで俺にはわかんないんだよ？」

「憲太だからだよ」

「なんだそれ」

「僕じゃないからだ」

学の声は心なしか震えているようだ。①「こんなの、この村で誰もわかる人はいない。僕にしかわからないんだ」

「だから、それ、なんなんだよ？」

憲太が叫んだと同時に、稲光が図書室を明るく照らし、音の衝撃が体の中で揺らした。学の手がびくりと動いて、机の上のテキストにぶつかった。テキストは床に落ちたが、憲太は窓の外を見た。雷は続いた。

ば、望む高校に行けないかもしれない、大学にだって

そして、苦しげに絞り出すような声で、こう断じた。

「生田羽村が、僕の未来を閉ざすんだ」

ああそうか——憲太は腑に落ちた——こいつは悔しいんだ。悔しくて泣いているんだ。②自分ではどうにもならないことが自分を邪魔していると信じ込んで

眼鏡を外して肘をつき、両手で顔を覆って、学はどうとう鳴咽した。憲太は暗さにまぎれてしまいたいような彼のつむじを、しばらく睨んだ。

「……だっせ。めそめそしやがって」

口から出た声は、憲太自身も驚くほどに低かった。

「おまえの未来って、なんだよ」

③その低さで、内にくすぶる怒りを憲太は自覚した。学も異変を悟ったのか顔を上げた。

「どんな未来が望みなんだよ、言ってみるよ、おい」

そういうえば、学の将来の夢を憲太は知らないのだった。憲太も教えていなかったというか、真面目に考えたことがなかった。学校でそういった課題の作文を書かされたこともなかった。

学の未来については、村の大人たちが口々に好き勝手なことを語るのを耳にするだけだった。

「……医師」

学も低い声で一言答えた。

「は？ イシ？」

「医師。お医者さんだよ、久松先生みたいな」

子どものころから世話になっている、穏やかで優しいおじいさん先生の像が、憲太の頭の中で結ばれた。

また雷が連続して落ちた。学の喉が、ひゅつと鳴った。

なるほど、医者なら難しいだろう。難しくなければ困る。人の命を預かる仕事なのだから。でも。

「俺、今のおまえみたいなお医者さんなら、診てほしくない。ほんとマジ、絶対やだね」

雷が落ちたみたいに、学の体がびくつと震えた。憲太はたたみかけた。「だって今のおまえなら、手術失敗しても、器具が悪かったとか、とにかく上手いかなかったら周りのせいにしそうじゃん」

「なんだって？」

学が眉を上げ、席を立ち、上目遣いでねめつけて「にらみつけてきたが、憲太は動じなかった。」

「おまえ、さっき言ったこと忘れたのかよ？ 自分の成績が落ちたのを生田羽村のせいにしてた。こんな田舎だから駄目なんだってさ。」

右手が勝手に動いて、向かい合う学の肩を掴んでいた。

「バツカじゃねえの？ 久松先生だってこの村の出身だぞ。そりゃたしかにここは田舎だよ。でも、それだけの理由でおまえが駄目になるなら、それはおまえがその程度だったんだよ。全世界のお医者さんは一人残らず都会出身なのかよ？ 違うだろ？ 本当にすごいやつは、どこにいたってちゃんとやれる。」

「でも」

④ 学が反論しかけた矢先、落雷があった。手の中にある彼の肩が強張るのがわかった。憲太はまた窓の外を見てしまった。空が明るくなることに、一面を覆う雷雲の形が、黒と群青と紫を混ぜたような色で浮かび上がる。

「でも……僕のことをすごいと言ったのは、僕じゃない。大人たちや、憲太だよ」

憲太の手首が、そっと学の右手で押しつけられた。冷たい手だった。

「大人にはなんと噂されてもよかったけど、憲太が言ってくれたのは嬉しかったから」

ずっと、誰よりすぐくあり続けなくてはいけないと思った——学は打ちひしがれたみたいになされた。

「あ……僕、憲太のせいにしたね」

学はもう泣き声をたてなかった。ただ、両手で顔を拭い続けた。雷が夜を走るたびに、唇を噛みしめ、目の下や頬に指や手の甲を押し当ててる青白い顔が見えた。憲太はだんだんと不思議な気分になった。学はクラスの中でははつきりと大人っぽい部類に入る。本校の生徒を含めてもそうだし、実際に目にしたわけではないけれど、札幌の進学塾のクラスでだって、群を抜いて冷静で落ちつき払った雰囲気だっただろう。けれども今、自分の前にいる学は、まるで子どもだった。雷に怯えて目を閉じ、耳をふさいでいた、遠い日のように。

そうか、嬉しかったのか。俺の言葉が。

もう何度目かわからない稲光と轟音が襲う。雷が光るたびに、幼かったころの学が今の学と重なり、⑤ さっきまでの腹立ちはどこへやら、憲太は自分でもわけがわからぬまま、笑っていた。

ただでさえ停電中のうえ、裸眼の学は視界がうまくとらえにくいのか、目を凝らすようにじっと憲太を見返してくる。

「僕も、嫌いだと思っただけじゃない……」

「来年おまえ、一人でやってみろよ。びっくりするほど時間経たねーから。あ、来年もおまえ札幌行くのか？」

学は特になにも答えなかった。構わなかった。憲太は心の内をそのまま言葉にした。

「とにかく俺、思ったんだ。友達ってすげえんだなあ、って」

嫌いだったつままらない時間も、一緒にいさえすれば、乗り切れる。

楽しみすら、見出せるかもしれない。

そういう力を持つ、自分にとってたった一人の相手。

「⑥ おまえが本当にすごいのは、そういうところだよ」

学は静かに顔を、フセた。

「俺さ、おまえのことすごいって言ったけどさ、別におまえが勉強すごいやつだから友達なんじゃないよ」

学の手が止まる。憲太は続けた。

「俺は学が神童だから好きなんじゃない。おまえがブサイクでも頭悪くても、おまえがおまえならそれでいいんだ」

「憲太……」

「テストの成績がすごいと思ったのは嘘じゃないよ。学が褒められるのもすげえ嬉しい。でも俺、おまえの本当にすごいところ、別にあるのを知ってる」

「え？」

「春休みさ、おまえいなかっただろ？ だから俺、ビート（さとう大根）の間引き作業、一人で手伝わされたんだよな」

稲妻に言い葉を切り、窓の外へと目をやった憲太を、学が遠慮がちに急かした。

「……間引き作業がどうかしたの？」

「ああ、それな。あのさあ、間引き作業ってすげえ面倒くさくてつまんねえの。おまえ、知ってた？」

「まあ、地味で遅々として進まない作業っていうよね。うちの親は好きじゃないって言ってた」

「だろ？ おまえは？」

「僕は別に好きでも嫌いでもない」

「俺もそうだった。でも俺さ、今年初めて、うわ、この作業つまんねえって気づいたんだよ。それまでは間引き作業を嫌いじゃなかった。うんざりなんてしなかったからさ。でも、本当は嫌いだったみたいなんだ」

学は頷いた。「それで？」

「でさ、なんで今まで毎年やってきて、嫌いだって気づかなかったのかなって考えてみてさ、俺わかったんだよ」

憲太は学の胸元を人差し指で軽く押した。「去年まで、おまえと一緒にやってたからだって」

⑥ 虚を突かれたような学の表情が、稲光に照らされる。その光の力を借りて、憲太は学の目を覗き込む。

「そうだよ、隣におまえが、学がいたから、「嫌い」や「つまんねえ」がごまかされていたんだ。おまえと一緒にやったから、あの間引き作業もそれなりに楽しかったんだ」

問1 太線部 a「背(けて)」・ b「群青」・ c「フ(せた)」について、カタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問2 空欄 A C に入る適切な語句をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|-------------|---------|---------|---------|
| A (ア) きつと | イ はつと | ウ つんと | エ ちゃんと |
| B (ア) そっけない | イ あどけない | ウ きこえない | エ せわしない |
| C (ア) せかせかと | イ ぐずぐずと | ウ あつざりと | エ うっかりと |

問3 傍線部①「こんな、この村で誰もわかる人はいない。僕にしかわからないんだ」とありますが、どのようなことが「僕にしかわからない」と言っているのですか。「——」ということ。」に続くあたりで6ページの会話文中から十四字で抜き出し、答えなさい。

問4 次は、傍線部②「自分ではどうにもならないこと」について説明したものです。空欄Ⅰ～Ⅲに入る適切な言葉を、それぞれ本文中から指定された字数で抜き出し、答えなさい。

生田羽村のような【Ⅰ(二字)】に夢を抱いた学の両親が、【Ⅱ(四字)】の事業に応じて東京からの移住を決めたために、学としては【Ⅲ(六字)】の整った東京で暮らす機会を失ったということ。

問5 傍線部③「その低さで、内にくすぶる怒りを憲太は自覚した」とありますが、このとき憲太が怒りを感じたのはなぜですか。その理由として適切なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 模試の成績が落ちた理由を生田羽村の環境のせいにして、責任転嫁をしている学
の態度にいらだちをおぼえたから。
イ 学習環境の整わない生田羽村においては未来がないと言い切つて、将来の夢をあきらめてしまった学に失望したから。
ウ 成績が上がらず落ちこんでいる学が自信を取り戻せるようにおだてたのに、ふり立つてくれずもどかしかったから。
エ 生田羽村においては努力しても未来は開けないと決めつけられたことが、憲太にとっては心外で聞き流せないと感じたから。
オ 生田羽村に不満をもち学が、まるで村に住むすべての人の暗い未来を予言しているように聞こえて不愉快だったから。

問6 傍線部④「学が反論しかけた」とありますが、学が憲太の言い分に対して納得していないことを暗示している表現を、傍線部④以降の本文中から四字で抜き出し、答えなさい。

問7 傍線部⑤「さっきまでの腹立ちはどこへやら、憲太は自分でもわけがわからぬまま、笑っていた」とありますが、憲太の気持ちはどのように変化したと考えられますか。分かりやすく説明しなさい。

問8 傍線部⑥「虚を突かれたような学表情」とありますが、「虚を突かれた表情」とはどのような表情ですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 心のまよいが晴れた表情
イ 新たな真実に気づいた表情
ウ 予想外のことに驚いた表情
エ むなしさのにじんだ表情

問9 傍線部⑦「お前がほんとうにすごいのは、そういうところだよ」とは、どのようなことを言っているのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 優秀な成績を収めても満足せず、停電の時さえ医者になるという夢に向かって勉強する学は、憲太にとって憧れの対象であるということ。
イ なかなか進まない間引き作業もこつこつこなせる学の我慢強さは憲太にとっての目標であり、互いに高め合える相手であるということ。
ウ 村の人たちから「神童」とほめられる学は、友人である憲太にとって自慢できる存在であり、大切な仲間であるということ。
エ 二人で行動するだけで何をするにも前向きな気持ちにさせてくれる学の存在は、憲太にとってかけがえのないものであるということ。

問10 本文中の「雷」は場面によってさまざまな働きをしています。二重傍線部X・Yにおける「雷」の働きとして最も適切なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

- ア 隠れて見えずにいた真相や心情を浮かび上がらせる働き。
イ 学が抱えてきた悩みの深さや気持ちの激しさを伝える働き。
ウ 憲太と学の関係にみぞが生じたことを印象づける働き。
エ 憲太と学の関係が完全に断ち切られたことをほのめかす働き。
オ 互いの言動によって生じる感情の衝突の大きさを表す働き。

